

スポーツとサバイバルユニット再考

鈴木 直文 一橋大学大学院社会学研究科教授

今日の私の報告は、我々の共同研究の「大筋」を通す作業をやってみようということかと思っています。2つポイントがあって、1つはスポーツ社会学分野でサバイバルユニットという概念を使っている先行研究をざっと見て、それを理解する作業。もう1つは皆さんそれぞれの研究関心をサバイバルユニット概念との関連でどういうふうに構成し直すことができそうかということを検討することです。詰めが甘いところが多いと思いますが、ひとまずざっくり、ぱっさりやってみることも大事かと思ひ、試しにやってみたというものだとお考えください。

1. エリアスの文明化論におけるサバイバルユニットとスポーツ

まず、坂先生に最初にご紹介いただいたものを含めてどういう先行研究があるのかをレビューしてみたところ、次のように理解できるのではないかと思ひました。エリアスが文明化論の中で何を言っているかということ、近代というのは相互依存関係が複雑になっていく過程です。そのなかで家族・部族・国家という単位が「サバイバルユニット」として想定されていて、その間に相互依存関係があるのだ、ということのようです。サバイバルユニットというのは、それがなければ死んでしまう、という単位なのですが、それと同時にアイデンティティを感じる単位であったり、あるいはその中でハビトゥスが形成される単位だったり、ということになるらしいです。

スポーツ社会学の先行研究を見ると、国家レベルをサバイバルユニットとして捉えるようなものが多いようだという感じがしました (Thing & Ottesen, 2010; Tuck, 2003; Maguire & Tucker, 2005)。特にマグワイア (2005) が、ちゃんとエ

リアスの議論を引き継いだもののようです。これは山下 (2002) に詳しいのですが、簡単にいえばエリアスが語っている時代以降のことをマグワイアが整理したということのようです。

ただ、山下 (2002) はマグワイアを厳しく批判しています。エリアスは、文明化していくと暴力が振るえなくなるから、暴力を振りたい部分をスポーツで担保する必要があるって、だからイギリスというローカルなところから発したものが、グローバルに近代化、文明化が進むのと同時に、必然として受け入れられてきた、ということを行っている。これに対してマグワイアは、その後の時代を分析するにあたり、イギリス発祥だったスポーツにおいてアメリカがヘゲモニーを取ることが起きたり、グローバルとローカルで引き合いがあったりという、パワーゲームとして描いてしまった。これによってエリアスの文明化論が持っていた普遍的な説明力が骨抜きになってしまったということです。

さて、これらの先行研究では、サバイバルユニットが必ずしも中心概念として使われているわけではないのですが、だいたいこういう構図だということが分かってきました。ひとつは、サバイバルユニットとグローバル化を語るときに、だいたいグローバルとナショナルというのが対抗軸になっていること。もうひとつは、アイデンティティとの関わりで、Iとweとtheyという言い方があるのですが、特にIとweの間のせめぎ合いが焦点になるみたいだということです。サバイバルユニットにアイデンティファイすることをweというわけですけど、ただそのサバイバルユニットというのは複数のものが重層的になっているので、Iはどのweにアイデンティファイするかをめぐって揺れ動く性質がある。

グローバル化というのが、サバイバルユニット間の相互依存関係が国家を超えてグローバルまでいくということを意味するとすれば、単純に考えると一番大きい単位であるグローバルにweという意識が移動してもよさそうなのですが、実際には国家のほうに、ナショナルのほうに引っ張られる力のほうが強いようにみえる、と。

私自身は、それが当たり前のような気がしてしまいます。theyに対抗するものとしてweが作られるのだとすれば、グローバルまで包んでしまうと対抗する相手(they)がないので、構造的にwe意識にならないのかな、と思ったりします。

エリアス自身は、そうは思っていなかった。ナショナルに引っ張り返されるのだけれど、それは絶対的な枠組ではなくて、揺らぎながら組み直されるはずだと。だからナショナルというサバイバルユニットの力は相対化されていくはずだ、ということをおもっていたような感じがしました。これは以前に坂先生が指摘されていたように、彼の晩年が東西冷戦の壁が取り払われていく時代と重なっていることとも関係していたかもしれません。これから世界は1つになっていくのだという期待もあったのだろう、と。

マグワイアの場合も、グローバルとローカルという対抗関係に焦点化をしているようです。ローカルとナショナルをどう区別しているのかは定かではないのですが、基本的にはエリアスがサバイバルユニットを家族→部族→国家→グローバルと同心円状に、地理的に拡大していくものとして考えていたことを、そのまま受け入れているという印象を持ちました。

我々のやりたいことはおそらくこれらの先行研究とは少し違って、エリアスの言っていたサバイバルユニットとは本来もっと説明力を持った概念だったのではないかと、我々なりに解釈を更新することで、もっとそのポテンシャルを引き出せるのではないかと、ということなのではないかなと思います。

2. エリアス以後の世界とサバイバルユニット

それがどういうことか、説明してみます。いま私たちは、グローバルに世界がひとつのサバイバルユニットになったかと思われた後、それが幻想に過ぎなかったことが明らかになった世界に生きています。それは、国家よりも小さい(民族、部族など)単位での紛争だったり、国家を超える信念(宗教原理主義など)のような単位の対立として、次々と顕在化してきました。世界は一向に1つにならないということは、僕らにはもう自明になってしまったわけです。

ただ、いわゆるグローバリゼーションといわれるような現象は押し進められていて、グローバル資本主義という形で加速していった。それは経済格差の拡大を必然的に伴うわけですが、これがグローバルな国家間の格差にとどまらず、新自由主義という政治的な運動と結び付いたことも手伝って、それぞれの国家の中でも格差が大きくなっていく(Harvey, 2007)。乱暴な議論ですが、大きくはこういうことが起きているのではないかと。

ここでまたエリアスに戻ると、彼は文明化、近代化が進むと機能的民主化というのが起きると想定していたようです(山下 2002)。近代化すると支配層と被支配層の相互依存が強まるので、支配層は被支配層のことをないがしろにできなくなって、権力の配分が均等化していく、ということのようです。しかし、そういう予測とは真逆で、ますます支配層が権力なり経済・政治的資源を蓄えるようになっていく。

こうして富がどんどん一部の富裕層に偏在していくという現実があるとすれば、大多数の人類はそれの恩恵をもう受けることがないわけです。そうすると国家とかグローバルという単位が、その人たちにとってのサバイバルユニットだとは言にくくなってきているのではないかと考えられます。

にもかかわらず、先ほどのエリアスのナショナル対グローバルの議論とも重なりますが、実際にはゆがんだナショナリズムみたいなものは、経済・政治的資源がない人たちの間にもはびこってい

る。そういう極端な形でなくとも、何となく国家というものが我々のアイデンティティーの源泉であり続けていることも確かです。あるいはグローバルがサバイバルユニットになり得そうもないといっても、やっぱり地球は1つということが好きで、環境問題に典型的なように、グローバルな連帯というところにアイデンティファイするコスモポリタンのアイデンティティーを自認する人も、一定数存在していたりもします。

その一方で、もうこのままグローバル資本主義とか国家とかに乗っかっていると死んでしまう、みたいなことに気付いて行動をし始めている人も、徐々に増えてきているようにみえる。例えばシェアリングエコノミーとか、農村とか山村のほうに移住して自給自足的なコミュニティーに回帰していこうみたいな人たちが出てきている。この一部の人々が気付いて始めている新しい動きのところ、我々は注目していきたいのだと思うのです。

エリアスの想定した近代が、サバイバルユニットの拡大とともにだんだん幸せが増えていくというようなものだったとすれば、それは全くの幻想で、どんどん格差が拡大する絶望的な方向でその後のポスト近代世界は進展してきたわけです。しかしもしかすると、いま根本的な制度変容の萌芽が始まっているのかもしれない。生活者自身が自らの生存を懸けて、国家などの近代的な制度から自立して、本当に生きていくための単位(=サバイバルユニット)というものを、もう一度つくっていこうとしているのではないかと。こんな時代状況の理解を前提にしてみたい。

3. サバイバルユニットの新陳代謝を駆動するスポーツ？

さて、そんな中でスポーツに注目するのが、我々です。これがなぜなのか、どういう意義があるのか、ということを考えてみたいと思います。各メンバーの研究関心とサバイバルユニット概念がどう風交差しているのかを考える作業を通じて、サバイバルユニットをいまの時代状況におけ

るスポーツに適用することの意義が何となく浮かび上がればよいと思っています。

まず、近代スポーツのグローバルな普及を文明化論に絡めて説明したエリアスに対して、ちょっと反論しておきたい。エリアスは近代スポーツを、文明化の過程において制度化された暴力だと解釈した。でも、近代スポーツには暴力的でないものもある。暴力的欲求だけのためにスポーツがあるわけではないと思うのです。やっぱり、やってみたらなんか楽しかったから、みんなやるようになったんじゃないのかな、と思ったりするわけです。この「楽しい」ということを追求するっていうのが、結構大事なところかなと思っています。

近代スポーツというのは、「楽しい」ものを画一的なルールによって文脈を共有してない人たちともグローバルに競争できるようにした。そういう意味で、やっぱりすごいツールです。どこかのローカルで始まった「楽しさ」を、どかんとグローバルにスケールアウトしたという意味で、すごいのだと思います。

ただそうやって近代スポーツがどんどん一元化されていくことで、それに当てはまらない「スポーツ的なもの」というのが抑圧されるという副作用もある。そういうことなのではないかと思っています。

抑圧されてきたもののひとつは、ルールに縛られず、自由に、自らの楽しさを最大化するために身体を使う、という営みなのではないかと思えます。坂上先生の剣道の事例は、この文脈で捉えることが出来るのではないかと思えます。剣道が戦後、復活するということを目指す中で、近代スポーツとして再生することが選択され、1つの規格化されたスポーツとして制度化されていく。それによって剣道は殺し合いの技術ではなく、スポーツとして普及した。

ただそうすると、「剣ってどうやって振ると一番いいんだっけ？」というのを自由に追究するような営みが忘れ去られて、正当な作法みたいな「剣とはこうやって振るのが正しいのだ」というのが押しつけられるようになる。そうすると、剣道が面白みのないものになっていく。それをもう一度、

楽しくしようというのが、坂上先生がお仲間とやっていたらいいことなのではないかと。あるいは甲野善紀さんとか長谷川智さんのような方がやっていることも、「昔の達人は本当はどうやって剣を振ってたんだっけ？」みたいな、探求する楽しみを思い出そうとしているような気がするのです。

いずれも、つまらなくなってしまった剣道に対して、楽しく剣を振る、あるいは楽しく体を使うということにもう一回戻っていきませんか、という、小さなユニットを育てていっているということなのではないかと。そういう何か自分の好きなことを楽しくするっていうのは、生存にとってすごく大事なことで僕はそのうち、こういう営みをサバイバルユニットと呼んでもよかろうと思うわけです。

次に、中村先生の場合です。日本柔道というのは、世界柔道が近代スポーツとして普及していく中で、「それは（正統な）柔道じゃない」なんてことを言いながら、でも結果は出してきた。一本じゃないとダメだ、とか、やっぱり投げじゃないと、とか、そういう美学を持ち続けながら、世界一の地位を維持してきた。だけどそれが限界に達して世界で勝たなくなってきた、じゃあどうするんだというときに、組織的に合理化を推し進めるという対応をした。それによってまた強い日本柔道というのを取り戻した。日本柔道というアイデンティティーを取り戻した。これを、日本柔道というサバイバルユニットの生存のための振る舞いと理解できる。つまり伝統スポーツが近代スポーツに近寄るという選択をすることで、伝統スポーツとしてのアイデンティティーを維持する、というような逆説がみられるわけです。

以上の柔道と剣道の事例というのは、伝統的な身体文化はやっぱりグローバルで普遍的な近代スポーツという単位と無関係ではいられなくて、そこ相互依存しながら、そこから離れようとしたり、そこに寄せていこうとしたり、というようなことを、生存戦略として使い分けているということのようだったと思います。結局は相互依存の話

だという意味では、エリアスが正しいということなのかもしれません。

岡本先生のエイサーも、これと似ています。国家と、沖縄というローカルとの相互依存関係のなかで、エイサーがローカルアイデンティティーの源泉の1つとして勃興する「伝統の創造」の過程というふうに見ることができる。ただ、エイサーがなんで沖縄のアイデンティティーの表象として力を持ち得ようになったかということ、もともとエイサーの主たる担い手だった地域の青年会というのは、それぞれの伝統に閉じていて、その外に出てくることがなかった。他方で青年会に縛られずにどんどん外に出て行くグループがあって、だんだんコンテストの制度化みたいなことも起きていって、近代スポーツ的な拡大の仕方をしていく。これによって、アイデンティティーの源泉になるぐらいの発展を遂げることができた。これは「エイサーが好きな人たち」というユニットの話なのか、沖縄というユニットのことなのか、両方なのかもしれないですけど、その辺りはもう少し考えてみないといけないのかなと思います。

尾崎先生の地域スポーツの諸事例は、かなり難しかったのですが、恐らくこういう事ではないでしょうか。地域において、多様なスポーツ、地域ならではの、あるいはその人たちならではのスポーツ実践というのが展開されていく。そういうプロセスを大事にされてきた。そこに、オリンピックのようなグローバルな普遍主義が入り込んでくる。これに対して、国家がナショナルな自我を出してきて、ローカルも何もかも一元的に動員する圧力が働く。そういう事が起きたときに、ローカルな創発性が阻害されてしまう。

この小さなローカルでの創発というのは、近代スポーツの枠内ではあるのですけれども、ちょっと自分たちならではのアレンジしてみる、というような創発性がある。ここでしか共有できない楽しみ方を生み出している。そこに、価値があるのではないかと思います。

ただし、この地域独自のスポーツを実践する単位というのは、必ずしもその地域のアイデンティ

ティーと重なり合うわけではない。恐らくスポーツというのは元来そういうものなのだろうと私は思っています。スポーツの愛好者たちが、たまたま集まってスポーツをしているにすぎない。しかし、これらのスポーツをやりたい人たちのユニットは、必然的に特定の地域に埋め込まれているので、そこでどうやって資源を確保しながら自分たちのやりたいスポーツを実現していくかということ、常に問われることになる。Jリーグなどはまさにこのケースだと思うのです。

これは実はスポーツに閉じた問いではなくて、ますます進展するグローバル化と新自由主義化のなかで、生活者の自由は如何にして守られ得るのか、という問いとも繋がっていると思っています。例えば、公共スポーツ施設をどんどん民間に委託していく中で、ますます創発的にスポーツをするということがやりにくくなっていく。これはスポーツという局面だけじゃなくて、今のいろんなところで起きていることなんじゃないかということです。

次に、鈴木の場合です。全体的なグローバルな構造的な働きが、格差の拡大を生む。そのことによって、このままだと死んでしまう、あるいは「よく生きる」ということがもう無理だ、というように人たちが増えている。そういう自由に生きることを制限された生活者の生存戦略としてスポーツを使う。これがダイバーシティサッカー、ダイバーシティカップの例なのではないか。(うつ病、ひきこもり、依存症、ホームレス状態など) いろんな難しさ、生きづらさというのを一度経験すると、社会のメインストリームからこぼれ落ちてしまって、すぐ戻りにくくなってしまうので、それ以降うまく自分の人生をデザインすることができなくなる。そういう人たちがその状況を何とかしようと思っても、格差が拡大して資源配分が偏っているのに再配分ではなくて市場原理が大事にされる世の中では、非常に難しい。市場には持てる者のための財しか供給されないの、持たざる者が自由に生き方を選ぶことは極めて難しい。でもそんなことを言っていたら死んでしまう。だ

から、自分たちのやりたいことを、自分らしく生きるということをやりたい人たちが集まって、ちょっとずつ生きやすい空間を広げようとしている。これがダイバーシティサッカーの本質です。

寄り集まって空間を広げていくということは、既存制度の中に自分たちの陣地を増やしていくことです。なので、その過程で交渉力が必要になる。陣地が増えていけば、交渉力が高まっていく。それによって既存制度が変容する可能性も出てくる。これは、家族・部族・国家・グローバルみたいなサバイバルユニットの捉え方とはだいぶ違っている。むしろもう家族も部族もうまくいっていないので、それに頼れない人たちが「楽しみ」を通じてつながることで、生存力を高めようとしているのではないかと思います。

最後に、坂先生のジェンダーに関するメディア表象の例です。これまでのものと少し位相が違うようなのですが、実は結構ダイバーシティサッカーに似た構図がみてとれます。日本だと例えばセクシーラグビールールみたいなのをテレビ局が作ってしまったり、グローバルに出したら絶対まずいようなものが、笑って済まされそうになるみたいなことが起きる。さきほどコスモポリタニズムの話をしましたけど、その水準での連帯と、日本的感覚との乖離(かいり)の話をされているのではないかと。ナショナルの枠で閉じていれば生きられるけれど、グローバルにつながるとまずい、という構図の話なのではないかと思ったのです。

これがダイバーシティカップと似ているのは、地理的に規定されたアイデンティティーとは別のレベルで、ナショナルの枠を超えるということが、世界のトップアスリートにはできることがある。アメリカの女子サッカー代表のラビーノ氏なんかもそうです。普遍化された近代スポーツだからこそ、そういう国家を相対化する契機みたいなものがあるのかもしれない。やはりグローバルなスポーツのサバイバルユニットと、生存のためにそこに依存するサブユニットとの関係性が、みてとれるわけです。

4. なぜスポーツがサバイバルユニットの再編を 駆動しうるのか

このように、スポーツの中にもサバイバルユニットを再編していく動きがあるし、スポーツを利用してサバイバルユニットを再編するような動きもある、ということを見てきました。最後に、ではなぜそういうことが起きるのか、ということを考えてみようと思います。まだまだまとまった議論にはなっていないので、仮説的な命題を列挙してみます。

命題1 スポーツは、自由への欲求を満たす。

命題2 スポーツは、自分らしさの表出であり、その表出を許されることは、尊厳を認められることである。

まずスポーツがなんで力を持つかということ、大事なことは恐らく暴力性でなくて、自由なのではないかということです。自由でありたいからスポーツをするのではないか。言い換えると、スポーツというのは自分らしさを表現することで、自分らしさを表現していいということは、自分の尊厳を認められるということである、と。

命題3 「楽しく生きること」は、人間の根源的な欲求である。

命題4 「楽しく生きること」は、「自由に生きること」と同義である。

別の入り口としては、楽しく生きることとは、人間の根源的な欲求なのではないかと思っていて、これができないと言われた時点で、生存が脅かされていると言っているような気がします。そして楽しく生きるということは、自由に生きるってということとほぼ同義なのではないかと思うのです。為末さんのブログに「楽しむこと」についての論考があります(『私のパフォーマンス理論 vol.46 -楽しむこと-』、2019年11月18日、<http://tamesue.jp/blog/archives/think/20191118>)。そこで為末さんが検討しているのも

「楽しむとは主体性である」という命題です。

命題5 近代とは、自由の拡大プロセスでもあった。

命題6 新自由主義は、他人の自由を制限してでも自分の自由を希求することを奨励してしまった。

よく考えてみると、近代というのは自由を拡大していく運動だったような気がします。しかし、新自由主義の時代になって、正統なリベラリズムとの乖離が起きてしまった。どういうことかという、みんな自由なのだけれど他人の自由を阻害するような自由を行使してはいけないというのが本来のリベラリズムであったのに対して、新自由主義では自由なんだから他人の自由が制限されようがされなかろうが、自分が得をすることを何でもやっていいということになってしまった(Amadae, 2015)。

命題7 自分の自由を希求することがぶつかり合うことで、人々は余計に不自由になってしまう。

命題8 自由であるために、他者と共生することは不可欠だ。

命題9 共生には、共に生きる単位としてのサバイバルユニットの次元と、サバイバルユニット間の相互依存の次元がある。

けれど、そういう他人の自由を犠牲にしなから自由を獲得しようとする、余計に不自由になるということが起きる。本当に自由であるためには、やっぱり他人と一緒に共生することが不可欠なのではないかということになる。この共生の次元には、サバイバルユニットとつなげて言えば、1つのサバイバルユニットをみんなで作るという次元と、複数の別々のサバイバルユニットがそれぞれに陣地をつくるのだけれど、お互いを排斥して殺してしまわない、というサバイバルユニット間の相互依存の次元とが想定できます。

つまりスポーツは全世界を包むようなサバイバルユニットを作るわけではないけれども、それぞれに好きなスポーツをすることで楽しく生きられるという人たちのユニット同士が、相互に依存しながらともに生きる、という次元があるのではないかということです。これはもちろん、スポーツ以外のものによって繋がるサバイバルユニットとの共生も含まれます。

命題10 新しい創発的スポーツ実践が生き残ろうとすれば、既存の近代的制度との相互依存を勝ち取らなければならない。

新しくサバイバルユニットを再編する営みというのは、新しい創発的スポーツ実践を生み出し、生き残ろうとすることです。それは新しくなんらかのスポーツをやりたい、ということでもいいし、既存のスポーツをこう変えたい、ということでもいいです。そうやって新しいスポーツ実践を始めたときには、必ずすでに今ある制度とぶつかって、その中で生き残るための資源を獲得していく必要がある。なので、やっぱり新しいサバイバルユニットが既存のサバイバルユニットと無関係でいることはできなくて、相互依存的になる。グローバルなシステムから降りて、そこで障地を新しく作っていくという単純な構図ではなくて、降りそうになりながら、依存もしながら、ということになるわけです。例えば自給自足のコミュニティを作り直そうと試みながら、インターネットは使っていたりとか、そういうことがあるわけですから。

命題11 そのような（不自由な）交渉が持続できるのは、スポーツが楽しいから（楽しく自由に生きるという根源的欲求を満たすものだから）である。

こういう交渉をしないと好きなことをできないというのはすごく不自由なわけですけど、そういう交渉が持続できるのはなぜか。それは、「だって交渉しないと楽しいことできないじゃん」とい

う、自分たちが好きなスポーツをどうしてもやりたいから、ということに帰結することになります。

ここまでたどり着いたところで、今回の報告はおしまいです。取りあえずこれが皆さんの議論の出発点になれば、というふうに思っています。ありがとうございました。

参考文献

- Amadae, S. M. (2015) *Prisoners of Reason: Game Theory and Neoliberal Political Economy*. Cambridge University Press: Cambridge.
- Harvey, D. (2007) *A Brief History of Neoliberalism*. Oxford University Press: Oxford.
- Maguire, J. (2005) *Power and Global Sport: Zones of Prestige, Emulation and Resistance*. Routledge: London.
- Maguire, J. & Tuck, J. (2005) National Identity, Rugby Union and Notions of Ireland and the 'Irish'. *Irish Journal of Sociology*. 14(1): 86-109.
- Thing, L. F. & Ottesen, L. (2010) The autonomy of sports: negotiating boundaries between sports governance and government policy in the Danish welfare state. *International Journal of Sport Policy*. 2(2): 223-235.
- Tuck, J. (2003) Making Sense of Emerald Commotion: Rugby Union, National Identity and Ireland. *Identities: Global Studies in Culture and Power*. 10(4): 495-515.
- 山下高行 (2002) 「グローバリゼーションとスポーツ—ノルベルト・エリアス、ジョセフ・マグリシアの描く像」有賀郁敏他著『近代ヨーロッパの探求⑧スポーツ』ミネルヴァ書房, 補論, pp.366-387.

質疑応答

【研究の射程】

中村英仁：本研究は、理論についての問題意識から議論していくような段階でしょうか。つまり、エリアスの理論や新自由主義への疑問、あるいはこれまでされてきたスポーツ論がおかしいぞみたいな話なのか。

鈴木：全部ですね。そこは今までほとんど研究されていないというか。

理論的なところでは、スポーツ社会学的にはエリアスやマグワイアが見逃していた契機があるのではないかと。主にエリアスが言っていたのは、グローバルはつながってしまったから、もう地理的に限定されない形でサバイバルユニットってというのは再編できるよ、ということなのかなとは思いました。

新自由主義というのは別に理論ではなくて、時代状況だったり制度的な流行り廃りだったりするかと考えています。キラキラした人たちにとっては先の希望が見えているかもしれないけど、全体的には絶望的な未来しか見えなそうになっている。そんな中で、実は結構したたかな希望の芽が出てきているんじゃないか、みたいなことを考えています。

中村：あとは近代スポーツの考え方。どのように整理したらいいのか。

岡本純也：エリアスはさまざまな個人の結び付き合いに、大きく分けて合理性で結びつく「道具的（インストルメンタル）な紐帯（ちゅうたい）」と非合理的な「情緒的な紐帯」を想定している。われわれが生きていくために必要な、生命を守るために必要な保護のユニットはそれら個々人の道具的な紐帯の枝と情緒的な紐帯の枝が複雑に結び合って出来上がる、国家のような単位がまずはエリアスの念頭にある。

近代が何を指していたのか簡単にとらえるのは難しいけれど、全体のグローバルな状況としては、経済的にどんどんそれまで結び付かなかった地域が海路、空路、鉄道などで結び付いていくプロセスですね。それは基本的には経済的な結び付き、合理性が支配するような競争構造がどんどん出来上がっていく過程で、そんな競争構造の中で単位として近代国家というようなものが形成された。世界的な国家間の競争は、非暴力的に経済的に行われもし、暴力的に戦争を通して行われもしてきたわけです。そのような競争構造の中では、合理的な、道具的な結びつきが支配的になりますが、同時に、ナショナリズムという情緒的な強い紐帯もつくりだしていった。

スポーツはまさに近代になって激しくなった人びとの移動を前提としてできあがった、象徴の世界での競争構造ですが、これは象徴の世界で人びとの情緒的な紐帯をつくることに貢献してきた。スポーツの世界も「合理性」が支配する競争であるといわれますが、実は、現在のグローバル化が進行する中で激しさを増す経済合理性の競争と少し違って、別のあり方で人びとを結びつけているのではないかと思います。経済的な、合理的な競争の中でできあがる単位の紐帯が人びとを抑圧するのに対して、スポーツは別の単位の紐帯をつくることになっているのではないかと。世界的な競争、経済的な競争、もしくは暴力を通じた闘争、競争が激しくなっていく中で、安心感、安定感も含む紐帯、保護単位というようなものが現在、問われていると考えられませんか。

鈴木：実は僕、情緒じゃないと思っていて、ものすごく物質的な現象だと思うんですよ。マグワイアなりエリアスなりが言っていた機能的民主化の話なんか、理念的なんですよ、とても。だけど、物質的な生存基盤っていうのがすでに偏在してしまっていて、理念的なことを言っても死んでしまうみたいな。だから情緒もインストルメントかもしれないけど、とにかく生きるために、物質的にちゃんと生きるために必要なものを調達でき

るように、ということなんじゃないかと、すごく思うんですね。

アダム・スミスが想定していたのは、市場で交換すれば自分が作らなくてもいろいろなものが手に入るようになっていって、豊かになっていくっていう話ですけど、僕が今すごく危惧してるのは、お金持ってる人がとにかくたくさんお金持ってる、持っていない人は全然持っていないっていうふうな世界になっていったときに、市場に出てくるものは、お金持ってる人がたくさんお金を出したいと思うものしか出てこないから、生存に関するものが出てこなくなるっていうことなんです。その次元の話はたぶん想定されてない感じがして。ここにスポーツがどうつながるのかは、まだはっきりしないんですけど。

坂なつこ：エリアスが『文明化の過程』を著したというのは、物質的/経済的なものだけを見ていては、権力の偏在が見えないっていうところがたぶん出発点で、だからこそ宮廷社会を研究対象として扱っている。一方で、たぶん今鈴木さんがしているレベルっていうのは、今の現実の社会の、近代社会の到達点というか、そこにおける極限状態のところの話なので、そこまでのところでだいぶ差がある。それを扱うためには理論的にはクリアしていく必要があるんだろうなと思っています。そうじゃないとスポーツって一番最初に切れちゃう部分だろうと、いらんじゃんといわれてしまう。だから物質的な基盤が必要だっていう主張と、だけどスポーツは楽しいからやるんだっていう側面をつなげる必要がある。

鈴木：死んじやいそうなきも楽しくしたいじゃないですか。

坂：だけどやっぱり物質的なものがないと死んじやうわけでしょう。どっちなのっていう話にしちゃ駄目なんだっていうこと。

鈴木：どっちなのっていう話にはしちゃ駄目です。

坂：極言すると、生存に必要な水だの食べ物だのっていうのがまず先にあって、それがあつたら生きていけるでしょうみたいな話になっちゃうから、そうするとナショナルミニマムみたいな話になるけど、そうじゃないんだというところに持っていけないといけな。

鈴木：だから資本主義のいいところもある。自由な創発によって価値を生み出すっていういいところはあって、だから楽しい世界が広がってきたんだと思うんです。だから資本主義を否定して、楽しんでいいじゃんということを否定して、(社会主義的に)分配するみたいなことは、つまらないからやめたわけだと思うんですね。多くの人が福祉国家みたいなのに抵抗があるのは、物質的に生きられる分だけただ分けるっていうのは、やっぱり楽しくないからやめたんだと思う。

坂：もう1つは、その楽しさ、何を楽しいと思うのかというのはたぶん変わるの。その楽しいは普遍的なコードとしては使えない。

鈴木：いや、でも中身は変わるけど、楽しさは変わらないですね。配ることはできないじゃないですか、楽しさを。

坂：でも身体……人間の何だろう、生物学的に規定されてない部分、何を楽しいと思うのかが規定されてないので、そこを巡る闘争である。だからちょっと抽象的なレベルがもう一段ある。

鈴木：そうですね、そのとおりです。

坂：エリアスでいうなら、例えば今われわれが見て暴力的だと思うものが楽しかった時代から、そうじゃなくなっていくっていう過程なので、「文明化の過程」は単純に暴力の制度化ではなくて。

岡本：暴力って楽しかったんだ。

鈴木:暴力は楽しいに決まってるじゃないですか。

坂:楽しいに決まってるかどうかは置いといて(笑)。

鈴木:いや、暴力は楽しいに決まってるんですよ。

坂:そう、テーマをそこで規定しちゃうと、たぶん楽しいも同じような議論になっちゃう。

鈴木:だから今日の報告の暴力の制度化に関する議論は、たぶん乱暴なんだろうなと思ったので、そういうご意見は聞きたかったんです。

【分析のレベル】

坂:権力構造、パワーバランスを見ていく必要がある。そこはやっぱり戦われていて、非常に辛い状況である人が非常に負けているように見えるけど、それに対してやっぱり対抗運動も出てくる。生活者が自らの生存を懸けて戦うっていう構図は、例えば環境運動や若者の政治的な運動も出現していて、確かに負けてるけど、でもあるっていう。

鈴木:そのときに、腹立たしいことに、すかした感じで「あんなに正面切って反対しちゃって」みたいな感じで、「新しい価値を創るしか世界は変わらないよね」みたいなことを言っているやつらが出て、それも一定分かるし、そっちのほうが楽しい。

腹立たしいのだけど、そっちのほうが楽しいから、社会を変えやすい可能性もあって。敵対的じゃないから、嫌な感じしないし。いつの間にかできちゃったみたいなものって、受け入れるしかないじゃないですか。なんかそんな側面もあるなと思って、スポーツって例えばそういうふうに使えるというか、そういうメディアになる可能性もあるかな、と。

坂:幾つか事例を見ていったほうがいい。例えばそのすかしてるっていうのも、わりと日本はそうかもしれないけど、海外ではそうじゃないギャップもあるじゃないですか。例えば環境問題、グレッタ・トゥーンベリさんなんかみても、子どものすることと軽く観たり彼女の活動を否定したりする人もいるけど、わりと海外だと若者の運動に結びついているという感じがする。

鈴木:日本と日本じゃないものを分けたほうがいいかもしれない。

坂:ジェンダーの問題もそうだと思うんですけど、欧米諸国で問題化されるようなことが、日本だと「まあまあ、熱くならずに」みたいになっちゃう。最近の#MeTooや、#KuTooなどがそこそこ広がってきていたり、以前に比べればより共感されているように見える。日本は世界経済フォーラムの「世界ジェンダー・ギャップ報告書」では153カ国中121位で、やっぱり絶望的になるけれど、とはいえそれでもそうじゃない有りようが広がってきているという状況もある。それをやっぱり絶望と捉えるか、サバイバルユニットという意味でのグローバルな基準、影響である過程とみるかは、非常に難しいところがあると思うんだけど。

現場の状況と理論枠組みは、分けつつ同時にみていく必要がある。そうじゃないと、絶望的なのか楽観的なのかみたいな話になってしまう。エリアスもそういう意味では非常に楽観的だって言われ続けているけど、『文明化の過程』の問題意識は近代化の中で苦痛が生まれているという認識が出发点になっている。ある人や時点から見たら楽観的に見えたり絶望的に見えたりするだけで、それが課題ではない。それを問題にしちゃうとやっぱりなかなかエリアスの理論フレームを、解釈することは難しい。

坂上康博:社会問題のレベルで、エリアスのいうサバイバルユニットやその可能性というのは、わりとよく分かるが、それをスポーツに落とし込ん

できたときにギャップがあるように思います。これは以前から繰り返し言ってることですが、サブイバルユニットをリアルな生存のための単位ととらえたときには、スポーツの位置はかなり下になってしまうのではないかと？衣食住などに関わるような、つまり生活に直接かかわる切実なユニットがやはり上位に位置づくのではないかと。

それでもそれなりに上位に位置づくのは、われわれの研究事例の中では、鈴木さんの例くらいだと思ふ。そこには確かに生きるための切実さというものがある。しかし、そうじゃない事例もあって、それらを含み込んで分析するというのは無理があるのではないかと。それらの評価軸って何か？それをやろうということだと思ふけれど、いけるかなと。

中村：だから分析レベルはいろいろあるよねって話じゃ駄目なんでしょうか。生きる上でスポーツが必要かと言われたら、必要ではないという話になります。たとえそれぞれのレベルで見ても、必要性は人によって違います。全人類に必要なと言われたら、それは違いますよと言うでしょう。

坂上：でもすごい抽象度が高い。全人類的な課題みたいなところから、ストレートに起こしてきてる感じがある。適合的なものもあるけど、もう1個違う枠組みみたいなものといったらいいのかな。何か必要じゃないのか。そんなことをずっと考えていて。

鈴木：僕としては、もちろん切実さが違うっていうのは程度の差だと思ふんです。切実さのゲージが高いところから低いところまであるっていう中で、一緒に生きている単位があって、そういうもの同士の関係性の中で、より生きやすいユニットにしていこうとしている事例が、いろんな次元であるのでは、っていう感じなんですよ。

坂上：具体的には、鈴木さんの今日の報告資料の4の中の「新しい創発的スポーツ実践が生き残る

うとすれば、既存の近代的制度との相互依存を勝ち取らなければならない」という点。これ自体はすごくよくわかるし、自分の事例にも当てはまる。これでいいんだったら、話は簡単なのですが、それと生存単位というレベルのギャップがどうなのか、ということなんです。

【創発性／創発的活動と型／ルーティン】

鈴木：僕はそれでいいと思っていて、しかも、僕はスポーツである必要はないと思っているから楽しみということに持っていきます。あるいは創発性とか自由とかに持っていきます。(昨年度修士課程に所属していた)栗栖さんの卒業論文がすごく、牛久(市)の収容所に通って収容されている人たちにインタビューしたのです。本当に生存を極端に制限されている人たちが何をしているかっていうと、クリエイションをしているんですよ。創発的なことでつないでいるんですよ、生きるっていうことを。すごい精緻な小さな模型みたいなのをたくさん作ったりとか、祖国でしか食べられないはずのものを運ばれてきた食材をうまく生かして自分の部屋で発酵させて作ったりとか、そういうことをやっている。そういう話を聞いて確信を持ったんです。どんなに死にそうになっても、人は創発的に生きようとするんだな、っていう。

坂上：でも、日本のスポーツ界では逆の生き方をしている人のほうが圧倒的に多いわけじゃないですか。創発的とは逆の繰り返し——剣道とか柔道とかまさにそうで、ひたすらそのやり方を死守する、保守するということによって生き残ろうとする。

鈴木：だから、我々の共同研究でスポーツを解体しちゃってもいいかもしれないですね。大事なのは創発性のほうなので。

坂上：保守的な営み自体も、生きる価値と言ったらいいか、そこにはそれなりの価値があるわけで

しょう。それを全面否定してしまっているのか、敵という評価になっていいのか。

鈴木：それは、僕ははじめは否定すべき相手なのかと思っていたのですが、考えるほどそんなことできないな、という結論になる。一緒に生きていくしかない。[発表原稿]クロポチの下から3つ目[命題9]ですよ。

岡本：逆にそのルーティンの中に逃げ込んでいるという可能性もありますよね。

坂：ボート部だった学生が、8人制のときに全員の動きの繰り返し、型にはめてくことなんだっていう話をしている、繰り返すっていうのは、たぶんその中にも創発性がある。

鈴木：韓氏意拳の日本の師範の光岡英稔さんが、型っていうのはすごい、型をとにかくやるのが探求だって言うんですよ。この型をやれ、というふうに受け継がれてきたものは、やっぱりすごいんだ、と。

岡本：だからその型を共有している者にとって、ほんのちょっと指を立てるとか、外側から見るとどれぐらいの差なのか分からないような微細な差異が、ものすごく大きな個人の主張につながっているように感じられる。つまりそれがすごくクリエイティブに感じる。

中村：ちゃんと整理したほうがいいのですが、でもそこで言っている話は、型でどんどん追求していくというのは、インストルメンタルな合理性、効率性ですよ。

鈴木：いや、僕がそれについて思ったのは、この型をやるって言ってやるんだけど、たぶん一回も(完璧には)できたことがないということなんじゃないかって想像しているんです。いつまでも追究の過程なんじゃないかと。

坂：効率化とか合理化に価値を置くかどうかというのも、時代の価値観になってくるから、それが楽しいっていう時代や社会が否定される社会がある。現代社会では合理性とか効率性の価値が高くなっていることによって、近代スポーツの価値がそこに置かれ続けてきているという面があるので、そうじゃなくなれば、効率的だから型をやるんだっていうのは、ちょっと当てはまらなくなる。

中村：だからそれは、ちゃんと分けて、事例を観察する必要があります。普通に考えたら、さっきの型の話は、やはり多くはなぜ型をやるかというところにいきます。型をやることによって、楽しいとかそこでいかに上手に型をやるかみたいな話になってきます。それは、合理的な話ですよという話なんですよ。例えば、もともとは型をやる意味は別にあったのです。

鈴木：型っていうのは、手段的に型にはめたほうがうまくいくようになるっていう型の使い方もあれば、たぶん韓氏意拳の光岡さんが言ってるのは、この型こそが目的で、この型ができるようになるから得するとかではない。習得できないかもしれない……たぶん体調によってまた違ったりとか、もう日々違ったりとか、なんかそんな話だと思うんですよ。そこに無限の広がりがあるから、型が無限であるみたいな。そんな話な気がしていましたね。

岡本：さっき僕が言ったのは、太鼓を習ったときに経験したことを想定した発言なんですけど、習い始めは人と同じ動きができるようになっていくという快樂、型にはまっていくということの快樂があって、それを超えると太鼓って、同じタイミングで周りの人と音が合っていればいいから、音と音の間を自分なりの振りで表現していく。新しい「型から外れて表現する快樂」がそこに見えてくる。周りの者も型を共有していて、自分がバチをくるくるっと回してから打てば「あいつ演奏の間にあんなことやってる」って評価されるというこ

とが分かっているからそんな快楽が生まれる。これは型にははまっているんだけど新しい表現をしているという感覚の快楽。同じ太鼓をたたいている者の間でしか共有できないような楽しさで、型の習得を追求した先にクリエイティビティが生じる。

中村：それは道具的ではない。

坂：一見型の繰り返しだけでも、実際にはパフォーマンスタイプである。ルールを共有しているので一緒にやれるっていう。ファンタジスタは、別に型を破るわけじゃなくて、そこから新たな表現の仕方をする。サッカーで、ボールを相手の股の下くぐらせるとか、オーバーヘッドするとか、破ってないのだけ創っているじゃないですか。しかも共有している。

鈴木：あいつらするんです。僕らがちゃんとやってるからおまえに価値があるんだぞっていうのを、いつも思う(笑)。

坂：スポーツの意味はそういうところではないか。共有してることができるようになるっていう。それに対して面白いと思うっていうような。

岡本：やっぱり情緒的な紐帯がそこに生じますよね。感情的な強い紐帯が生まれる。

坂：おそらく情緒的な紐帯を満たすことができ、だからこそ政治体制であるとか経済的な問題とは違うレベルでの、サバイバルユニットを形成し得るっていうことだと思えますよね。そこを喚起させるっていうか。

中村：でも今の話だけだったら、例えば普通に仕事していても、これやりなさいよという型があって、こういうやり方で仕事進めなきゃいけないとあってあるじゃないですか。工場で車を作るとか。すごく簡単だけれど自分なりのやり方で、どん

どん創り出して行って、その果ては例えばQCサークルというサークルが作られて、俺のやり方もっといいぜ、というような話になって称えられる、みたいな。

鈴木：それ創発性だね。

尾崎正峰：そうした問題を考えるのであれば、フォーディズムなど労働問題の領域にも目を配ってとかなるけれども、そこまで広げることがどうかとも思ってしまうところがある。

坂上：話が広がっていくけど、実践のレベルでの創発性が、サバイバルの源泉になり得るといふことと、共生というのも、つまり共に生きる単位というのもサバイバルユニットだといふこととは、次元や関係性が違うよね。

鈴木：創発をするには、QCサークルみたいな「いいじゃんおまえ！」っていうのが必要で、それを共有する人(=ユニット)がいないと創発する甲斐がないというか。ただ、こっちの創発には別に価値を見出さない人たちが、別の創発をしていたりもする。創発は多様だけど、完全に個別ではないっていう、なんかそんな感じですよ。

坂上：僕らがやってるような「のびのび剣道学校」や甲野善紀先生がやっている古武術の取り組みなどがそれに当てはまるんじゃないかというのは、そうかもしれないなと思います。そうすると剣道で言えばそれを統括している全日本剣道連盟の取り組みをどう見るのか。あれはサバイバルユニットではない？

鈴木：想像ですけども、剣道連盟がサバイブしたいときに、試行錯誤しながら組織をつくり上げていく過程は創発的だったんじゃないかと思えますよね。なので、そこはサバイバルユニットでいいんだと思います。ただ、そのサバイバルユニットが、その単位につながっている個々人にとって生き

づらいものになってきたときに、その再編なり新陳代謝ということを許容しておかないと、その中で生きづらい人がどんどん増えていってしまう。

坂上：複数のサバイバルがあるという、そういうイメージ？

鈴木：そうですね。だからここから離れていきながら、でも完全に離れることにはならない、みたいなことが面白いなと思っています。

坂上：関係を持ちながらね。

【自由／制限】

尾崎：鈴木さんがキーワードとして出された「自由」ですが、スポーツにおける自由の価値はわりとよく言われてきたことだけれども、サバイバルユニットとはどのような結び付きなのかと思って聞いていました。直接関係ないけれども、頭に浮かんだのが、今年(2019年)は「ベルリンの壁」崩壊からちょうど30年ということです。30年前の大まかな受け止めは、社会主義のもとで抑圧されていた人々の自由の獲得というものだった——ただ、当時の経団連の中には「これで資本主義が勝利したと思う人は、中学生程度の学力だ」と言われた方もいましたが——。その後、東西ドイツ統一など事態は進展したけれども、時を経て、本当の自由は何なのかということが問い直される時期になっているなと感じています。同時に、感覚的なものだけれども、自由というものの持っている理念はやはり重要だと思うという、行きつ戻りつみたいな感じです。

鈴木：そうなんですよね。自由を脅かされることと、生存が脅かされるのが一緒だっていうのは、香港で起きていること見れば分かる。たぶん日本人は生存が脅かされると感じるほど、まだ自由が脅かされてると思ってないっていうか。

自由って言ったときに、権利としての自由とい

う側面が一方にあり、もう一方でアマルティア・セン流の潜在能力としての自由という側面もある。たぶんその両方が関係ありそうだなと思って、取りあえず自由っていうキーワードだけを入れてある感じです。

中村：ちょっとすみません。サバイバルユニットは、だからアクションフレームというか、誰と誰がどのように動く、みたいな話だと思います。そのサバイバルユニットの変換する速さが、スポーツの世界だととても速いという感じがあります。楽しいからまずみんなが「うおー」と寄ってくるということがあるでしょう。また、スポーツの持つオープン性のようなものがあるから、みんなが「ぱーっ」と注目するとか。

そのような速さみたいな、サバイバルユニットの新陳代謝の速さみたいなものを見ていくという価値は、特に今はメディアがいろいろ発達しているから、その加速度を見ていくのは意味があるかなと思っていますね。

尾崎：新陳代謝ということで思ったのは、鈴木さんが言われたように、自由は生存のために不可欠なものということ、それはおそらく命題として成り立つ。そこでもう1つ広げて考えると、自由が少ない、あるいは自由が制限されているサバイバルユニットは存続し得るのかということ。ある意図を持って何かをしようと思ってサバイバルユニットが形成されるけれども、一定程度、時間が経過をしていく、あるいは活動が拡大をしていくことによって、自由が制限なり、あるいは、なくなってくるという時点において、サバイバルユニットとしての役割を終えて、何らか別の形に点綴(てんてつ)するのか、言い換えれば、サバイバルユニットとして成立しなくなるのか。

鈴木：究極的には成立しなくなりそうですね。

坂上：マグワイアの図では「残滓」としてでてくる。

鈴木：さきほどの剣道の話と同じことのような気がしますけど、自由に楽しむっていうことが制限されると思った人は、違う実践をつくりたいと思う。だけど、まだまだ自分の好き勝手にできるみたいな意味で、(その集団内で権力を持っていて)自分の思いどおりできる自由を感じられている人たちにとっては、変える契機はない。ただ、その状態を不自由だと感じる人が離れていってしまうと、実はこの人たちは自由にできなくなる。自由にいいなりになってくれる人がいないから「しまった…」ってなる。そんな感じの力学かなと。

尾崎：全体主義じゃないから、みんなが同じように動くということもないからね。

岡本：中国というサバイバルユニットとしては、自由が制限されているんだけど、それに甘んじて黙っている人たちもいれば、香港の人たちのように立ち上がる人もいる。

鈴木：残滓ですね。

岡本：だから香港の人たちが、何が嫌でここまで反発しているのかということに注目する必要がある。自由が制限されているのは、他の中国国内の地域と同じはずなのに、香港の人たちだけが激しく抵抗している。

中村：でも、そのアクティビティーが権力によって抑えられて、終わる感じするじゃないですか。どちらかの戦いになって。でもスポーツだったらいろいろな戦いがあって、いろいろな戦いのチャンスがあって、どちらが正しいのかというような戦いがずっと繰り広げられる感がありますよね。そちらの思想的な戦いだと、もうどちらかが倒したら終わりみたいな感じになってしまいます。スポーツの世界の戦いの続きやすさといえますか。

岡本：戦い方の展開の方向性(何をめぐる闘争なのか)が問題になる。

中村：その見え方。

坂：それはやっぱり、戦争のメタファーっていうのは駄目なんです。結局、敵一味はどっちななくなっちゃうから。スポーツは、同じレベルで存在する要素。みんな仲良くやろうねって意味での啓蒙として使う分には、戦争のメタファーじゃないんだよっていう、戦争とは違うんだよっていうふうにして使う分にはいいと思うんですけど、勝ち負けみたい……勝ち負けっていうか、戦争と並列して語る分には、実はスポーツって不備があるというか。なので、話が戻りますが、だからスポーツって、平和でいいねみたいな話になっちゃって、つまり香港と中国の話でいえばどっちかが死ぬわけだから、それと比べると……。

鈴木：ルールに則った闘争としてのスポーツという次元の話というよりは、スポーツのルール自体を闘争しているのがサバイバルユニットの相互作用なのだと思います。そういう意味だと、中国と香港と同じ構図のような気もします。もちろん、その切実さは違うのですが。

坂：香港の状況をサバイバルユニットと関わらせるとすると、自由よりは、どこに参照枠を置いているのかの違いで語ったほうが、たぶん当てはまる。自由の定義は非常に難しい。

【生存に不可欠な“楽しさ”】

中村：僕はその、自由はちょっと取り込む力が無いのですが(一同笑い)。楽しいは取り込めると思います。

坂上：鈴木さんが言った「楽しい」ということと、エリアスの「興奮の探求」というのは距離が近くないですか。

坂：鈴木さんが言ってるほうがもっと何て言うか、情緒的なんだけど(一同笑い)。エリアスが言う

ところの興奮、エキサイトメントであるとか、テンションとか。

そういった意味で、制御される、規定されてく身体に対して、それを取り払っていくような。場としてのスポーツ。

岡本: エリアスは「テンション」という言葉を使っていますが、文明化が進行すると人びとの内部に自己抑制の内圧が高まって、スポーツのような場でこれをリリースする。

坂: それが例えば暴力的に、血なまぐさい暴力から、血を見なくてもいいようなテンションの状況になっていくっていうようなことが、文明化の過程なので、そういった意味では楽しさっていうふうに鈴木さんが言ってることは、たぶん翻訳できる。

中村: その時代を語る上だとエリアスの言葉に近いし、別に今の時代の楽しさは、別にあってもいいと思いますけど。

鈴木: 楽しさって言っちゃうと、なんか切実さが足りないから、興奮でもいいですよ。

坂: 楽しさって言っちゃうとやっぱり、なくてもいいものみたいな話、つまり水とかパンとかよりは地位が低いみたいになっちゃうから、そうではないんだっていう。生存に必要なんだっていう。

中村: 生きていくのに楽しくなくてもいいみたいに言われたら、それは違和感がありますよ。だから経済学的に見たら、生きる上で必要なのは何か、あるいはどのような優先順位か、つまり経営する上ではいらぬよ、という言い方ですね。

坂: 本当にいらぬんですかっていう話。生きていく上で必要なもののほうが、制限されてきたのがやっぱり近代じゃないかというふうに思うわけですよ。なのでそれからこぼれていく人たちが、極限に置かれていくっていう。

中村: それは大いに賛成する。それを何とかしなきゃいけないって話でしょう。

鈴木: だけど、ちょっと戻るんですけど、岡本さんがおっしゃった「香港の人たちは何で？」っていう点ですが、僕らはみんな自由に冒されているかもしれないですね。自由を信奉することは正しいと思わされてきただけかもしれないって、ちょっと思っていました。

坂: だって日本って自由なのって話もあるじゃない。

中村: そうね。

鈴木: 日本は自由じゃないですよ。

坂: 例えばバスケットボールで言ったら、4歩歩きたい自由は制限されるわけじゃないですか。

鈴木: ジェームズ・ハーデン以外はね。（* NBAの選手、ステップがトラベリングとなるかどうかで議論）

坂: 歩きたいなら違うスポーツつくれとか、ハンドボールすればいいじゃんって話になるけど、バスケットボールを楽しみたい人には意味がない。

鈴木: でもそう、そういうことです。

坂: ここで自由であるために他者と競争することはゲームにおける要素であるので、不自由であることは不可欠になるわけでしょう。

鈴木: だから自由と不自由のバランスによって、より自由になる、という。

坂: エリアスのいう妥協 (compromise) は、ネガティブワードのように捉えられちゃうけど、そうではなくて、それがなくて生きていけないって

う状況。

中村：僕はこの自由はちょっと回収できなのですが、なぜ自由の議論しているのかっていうのがちょっと知りたい。

鈴木：創発性は大丈夫ですか。

中村：それは大丈夫。

坂：私、尊厳が自由なんじゃないかと思うんですけど。

中村：違う違う。

鈴木：尊厳大事です。創発性は自由とほぼ一緒になってこないですか。

坂：無制限の自由はあり得ない、人間として。

鈴木：無制限の自由はあり得ないですよ。不自由さを受け入れないと、みんな自由にはならないから。

中村：もう1つ前の、なぜ自由の議論が必要だっというところの、そのところを。

例えば自由に関してエリアスとかの議論が足りないよね、というような話なら分かる、受け止められますよね。エリアスの言っていることは、現代社会を捉える上では少し捉えて切れていないよね、というようなことを問題意識とできますけど、なぜ自由が必要かの議論は、問題意識がないというか。

坂上：今日の報告では、エリアスのいう暴力の制度化ではなくて、むしろ自由の方だというふうに聞こえたんだけど。そこが出発点だよ。

鈴木：暴力の制度化ではなく、楽しいものが制度化されたのではないかっていうことを言おうとし

ていました。制度化されたものが楽しかったっていうか、制度化されたものの中で楽しいものが受容されていったみたいな、そんなことかもしれないですけど。制度化される過程のことには、言及できていませんが。自由が出てきたのは、エリアスに対するアンチテーゼではないような気はしません。

坂上：別なんだ。

鈴木：ちょっとこの辺、私も本当に頭に浮かぶままに書いたので、自分でもつながりがはっきり分からないんですけど… ルールに縛られず自由について書いてしまっていますが、ルールに縛られることによる楽しさっていうのもあるし、その中でも創発性は出せる。だけど、縛られない自由っていうのも当然あって…

中村：でもその議論をするには、だからエリアスが自由についてこういう言い方してるみたいなたぶん話がまずないと、エリアスの言ってる自由と違うんだよみたいな。

鈴木：あるいはエリアスは自由の話をしていない、ということを示せば、それでもいいですよね。

中村：しても意味ないという話ですか？

坂：そもそも主体性という話はエリアスには入ってこない。ここで言うと社会との関係性。たぶん、エリアスに引きつけて言うんだったら、個性みたいな話。ここでは自分らしさ。創発性っていうのは個性のことじゃないのかな。エリアスでいうなら、多分バランスなんです。

中村：いや、それちょっと待ってください。エリアスは、エージェンシーとストラクチャーという関係において、アクションがどのように起こるかというような議論をしているから、自由みたいな理念の話はしてない整理があると思います。そこ

で、そこに理念みたいなワードを付け加えなきゃいけない、という話だったら、まず導入としてはあると思います。

鈴木：僕が批判しているのは、エリアスではないのかもしれませんが。エリアスのサバイバルユニットを応用している他の論者が、面白くないという話なのかも。エリアスはいいいこと言うんだけど、こうしたらもっとよくなりそう、みたいな話をしたい感じでしょうか。

坂上：そこはまた詰めていただくことにして。自分の事例を論じるのに「自由」の議論を入れるのは、ちょっと距離があるという感じもしたけど、「楽しく生きる、そのための単位」ということや「ともに生きる単位」「その中で新しい創発性が生まれる」とかは、非常によくわかるし、「新しいものが生まれたら古いものとの間で相互依存が続きながらも、交代あるいは古いものの残存を含みながらの再編がなされていく、といったダイナミックな変化というのは、自分の事例に引き寄せて書けるかなという感じはしますが、皆さんどうですか？

鈴木：坂上先生の線が一番実はマッチしているんじゃないかとも思いますね。

坂上：そんなことはない。鈴木さんの事例が一番ストレートですよ。

尾崎：去年の合宿の研究会の最後に、自分のやってきたこととサバイバルユニットとを何とか結びつけられるかなと発言した覚えがありますが、今日の議論で地域のスポーツクラブを対象とすればどうだろうかなど、少しだけ具体的な見通しが立ったようにも感じます。

中村：R. ベラーは、価値判断をめっちゃくちゃ研究に入れてますよ。彼は、自由とは何か議論していませんが、どのような価値が生まれているか、

どのような価値が捨てられているかというのをきちんと考えなくてはいけないと言っています。ベラーは、アメリカ人にとっての生きる意味って何だということが、現代になってアメリカ人はみな捨てていると言っています。実は生きる意味が、ほぼいらぬというような状態になってると。たとえば、なぜあなたは幸せなのかと問われたときに、年収が幾らということをやっているといるアメリカ人が増えてきたと。600万ドルで幸せだね、じゃあ次俺800万あったらもっと幸せじゃん、ということをやっているのです。でも、一部でそうじゃない人たちがいて、そのそうじゃない答えというのはどのように生まれるかということをやっているんですよ。

岡本：香港で生きてる人と上海で生きてる人っていうのは参照枠が違うんじゃないのか。ある一定の型にはまって、抑圧の状況であっても、そこにはまればその中で創発というものの楽しさを味わうことができるんだけど、別の参照枠に気付いてしまうと、そこでは満ち足りることができずに、それを許されないと、生きていくのがつらくなる。

僕の研究対象であるエイサーは、それぞれの集落ごとに型があって、そこにはまり込むことによって、青年はちょっとはみ出すことの中に楽しみを見出して、見てる人も「おお、今年の若者はこんなことした」という、そのような楽しみがある。もうそこからも超越して、全然こんな沖縄民謡なんてやんなくなつていいじゃんっていうような、そういう参照枠の者にとっては、そこにはまり込むということは、非常に抑圧を感じる。

中村：僕にとって柔道は、伝統的な参照枠と新しい参照枠がぶつかり合って、古い参照枠に寄りながら内破的に新しい参照枠つくっていく、みたいな過程が生まれてくるプロセスとして描けます。ただし、それはサバイバルユニット概念を使わなくてもいいんじゃないかと言われますが。

鈴木：使う必然性があるわけではないんですよ。でも、積極的に使ってみたら面白いかもね、ということです。

中村：だからみんなが寄り合って、よし俺の分野で別にそんな言葉使わなくてもいいけど、今回じゃあみんなで寄ったからエリアス使ってこう言っちゃえみたいな。

岡本：「伝統文化」も基本的にはこの一定の型にはまることによって標準化がされて、アイデンティティの確立につながる。そこからはみ出していく運動というようなものもある。そういうようなことを、別の言葉で言うことはできるかもしれない。

坂上：今日のところはおおまかな感じで、来年には決着付けられるようなペースでいきましょう。

鈴木：はい。ありがとうございました。

(2019年11月22日、群馬県太田市駅なか文化館にて収録)